

地域(ゾーン)におけるトポス・コンテンツの発見と コンテクスト形成 —日光市の豊富な地域資源による複数コンテクストの編集—

石川 和男

はじめに

2020年初から3年以上も継続する新型コロナウイルス感染症による「地域(ゾーン)」への影響は計り知ることができないほど大きい。これまで観光需要により成立していた地域にとっては、「大打撃」という言葉では語り尽くせないほどの影響を被っている。それは政府による「全国旅行支援」など一時的かつ短期的支援では、到底埋め合わせすることが叶わず、追いつかないものであろう。

本稿では、特定地域に対する誘客（観光客・ビジネス客）とそこにおける訪問者各人のコンテクスト形成を中心に上げる。とくに2022年度の社会科学研究所夏季実態調査で訪問した栃木県日光市は、国内外からの訪問者により経済が成立していた地域が多く所在する。そこで特定の場所（トポス）をとらえた観光(誘客)プロモーションの継続について、新たなトポスやコンテンツの発見やそれによるコンテクスト形成というとらえ方を中心として、トポスの集合としてのゾーンを意識しながら取り上げていきたい。また昨今は、2015年に認定が開始された「日本遺産」に代表されるように、トポスやゾーンに対して「ストーリー」を重ねることが重視されるようになった。これはトポスやゾーンにおけるコンテクスト形成と重なる部分が多分にある。

他方、これまで理由なく訪問者（観光客）が増加したことにより「オーバーツーリズム」や「観光公害」といわれ、一部においては歓迎されない状況を招いたことは、コロナ禍によって改めて当該ゾーンをとらえ直し、将来的なあり方を再考する機会を与えている面がある。そこで、地理的に狭い地域に多数のトポスやコンテンツ、それらの集合としてのゾーンが存在する日光市を中心として、トポスやコンテンツを見直し、整理することにより、複数コンテクストの形成可能性について考察していきたい。

1 トポスにおけるコンテンツの発見

わが国では、これまで「地域活性化」や「地域振興」など、人口減少が明確になる以前から、

地域でのさまざまな課題が取り上げられる機会があった。こうした課題については「地域課題解決」への取り組みや「地域マーケティング」などにより、対応してきた側面がある(上野(2010) 小林(2016))。そして、こうした取り組みによって、以前よりも改善がみられた地域の事例を「地域活性化の成功例」「商店街再生の好事例」などとして取り上げてきた面もある。しかし、こうして「成功例」として取り上げられてきた「事例」は、果たして現在どのようになっているだろうか。これに対する検証や定点観測は、ほぼ行われていないようにも感じられる。われわれは、一時の「改善」「維持」を「成功」と呼び、持て囃したことに違和感をもち、反省すべき点もあろう。また改めて地域の課題に取り組もうとするとき、何らかの方策や手段、方法論を持つべきとも思われる(矢吹(2013)原田他(2021))。こうした取り組みは、徒手空拳でうまくいくこともあるが、それを他の地域へと援用することは到底できない。

各地域においては、それぞれ異なった事情があり、一概にまとめて同様の手法を用いて取り組むことはできない。しかし、何らかの知識や情報を蓄積することにより、それらを参考にしたり、反面教師として取り入れたりすることは可能であろう。したがって、こうした取り組みを記述し、残しておくことは意義のあることである。

本節で取り上げる「ZTCA デザインモデル」は、こうした地域の課題に取り組むための一視角として位置づけられる(原田(2013)原田・古賀(2013))。それゆえこれを援用することにより、すべての地域が活性化したり、再生されたりするというものでは決してない。しかし、地域においてさまざまな課題を抱える人たちや、そうした課題に取り組もうとしている人たちの「参考」にはなるものかもしれない。

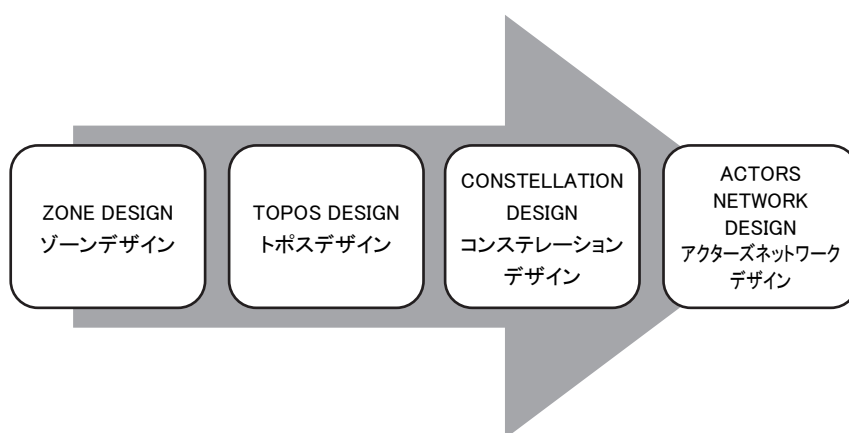
(1) ZTCA デザインモデル

先にもあげたように「地域活性化」という言葉が聞かれるようになって久しい。それへの取り組みもこれまで数え切れないほど紹介されてきた。その当時、これらは順調に滑り出したり、短期的な成果を上げたりした事例ばかりである。しかし、その後継続してその取り組みが行われていたり、成果を出し続けていたりする事例が紹介されることはほとんどない。それはなぜなのだろうか。一方、地域活性化に取り組んだのはよいが、いわゆる「失敗」をしたと報告される事例もほとんど紹介されない。ただ失敗事例は、こうすればうまくいく(いった)ということを紹介する以上に、こうした行動や活動をしたために失敗した(うまくいかなかった)ということからは、大いに学べる面がある。

地域活性化については、「地域をデザインする」という視角から研究・実践が継続されて行われている(山崎他(2016))。図表1に示すようにZTCAとは、Z(zone)、T(topos)、C(constellation)、A(actors network)のそれぞれの頭文字をとったものである。これは2013年に一般社団法人地

域デザイン学会により提示され、その研究自体やこれに基づいた実践が積み重ねられている(原田(2013)原田(2014))。また ZTCA デザインモデルは、Z からスタートするだけでなく、どれを起点としても地域デザインをすることは可能とされている。ただゾーンの把握やトポス発見における苦労、さらにアクターズネットワークにおける人材不足、そしてコンステレーション形成の難しさなどは、これまで指摘されてきた通りである(原田・宮本(2016)原田他(2020))。これは、単に地域活性化に取り組む地方自治体や地域がそれぞれ同じような目標を持ち、活動する NPO などの支援団体においても同様である(佐藤他(2011)大森(2015)嶋田(2016))。

<図表 1 ZTCA デザインモデル>



(出所)原田(2016)を青山(2019)が一部修正

ZTCA デザインモデルについては、①固定的に把握するだけではなく、地域が活性化し続けるということであれば「持続可能性」を目標とすべきであり、②柔軟に変更可能なデザインモデルであるかなど、これまで多くの疑問や批判などを受けてきた経緯がある(原田他(2019))。その中では、観光政策のあり方や周辺事業への影響などについては、新たな価値形成を行う必要が指摘されてきた。そのように考えると、ZTCA デザインモデルは永続的なデザインではなく、また朝令暮改的なデザインでもない。そこには「中期的なデザイン」であることが目指されるべきかもしれない。したがって、社会科学でしばしば目指されたり、言及されたりする理論などではない。また当該分野を得意とするコンサルタントが思いつきで提示するように、場所や地域名を変えれば、どこでも適用可能性があり、柔軟すぎる単なる「アイデア」でもない。そこでは、ある程度の時間経過に耐えられる確固たる方針を持ちながらも、ただ長い時間経過の中では緩やかに変更させることが可能なモデルであるべきことが目指されるべきであろう。

(2) 地域デザイン

「デザイン」というと、かつては芸術分野における「意匠」を中心としたものがまず思い浮かんだ。しかし最近では、デザインという言葉の範囲はかなり拡大したというか、別次元で取り上げられるようになったといえるかもしれない。そのため、かつての意味を大きく変化させている。とくに現在は、デザインに対しては、「設計」「構築」などかなり大きな意味でとらえられるようになった状況がある。もちろん「地域デザイン」というときにも、設計や構築という意味に置き換えても全く差し支えない場合も多い(原田(2020))。ただその言葉そのものであれば、わざわざ「デザイン」という言葉を使用しなくともよい。そのように考えると、やはり「デザイン」にはさらに別の意味、あるいはプラスアルファの意味も持たせなければならない。こうした議論はまた別の機会に譲りたい。

「地域デザイン」というときには、基本は「誰のためのデザインか」をまず考える必要がある。それは、地域活性化は誰のためにするのかということと同義でもある。しばしば地域デザインでは、地域を取り巻くステークホルダーによって、多様なデザイン構築が志向される場合が多い。またそこでのトポスやコンテンツの発見については、ステークホルダーによって多様に解釈される場合がある。さらに「発見」には複数の意味がある場合もある。とくにトポスやコンテンツが複数存在し、それらを1つのコンテキストでは説明できない、連携がうまくいかない場合が圧倒的に多い。そこではトポスやコンテンツの選別を行ったうえで、わかりやすい1つのコンテキストとしてまとめていく必要があるだろう。これは例示すれば、ある観光地について歴史を中心として観光客に訴求するのか、それとも映画やドラマ、アニメで取り上げられた「聖地」の巡礼の場所として訴求するのか、さらに「グルメ(独特な食事・料理)」を中心として訴求するのかということでも示すことができよう(大森他(2020))。

こうした面からは、地域デザインは別のトポスやコンテンツの把握を改めて行い直し、別のコンテキスト形成を目指すべきであるかもしれない。また特定地域で複数のコンテキストの形成可能性を考慮する必要もあろう。その方が観光客に複数のメニューを提示することができることにつながる可能性が生まれるかもしれない。これについては、多くの観光客の目的が何かを明確にすることにより、形成される場合もあろう。(ただ観光客が明確な目的を持って観光していない場合も多いが)そこで、誰にとつての、ということが何度も問い直されることになる。もちろん、その「誰」により、トポスやコンテンツを再考し、そのターゲットに向けて形成し直すことが要求される(原田 2020))。

誰にとつての地域デザインであるかを考慮する際には、図表2に示しているように当該地域の居住者にとつてなのか、その地域を訪問する観光客やビジネス客にとつてなのか、それとも最近では「関係人口」と呼ばれ、居住者でもなく、一時その地域を仕事や観光で訪問した人でも

<図表 2 関係人口とその概要>

関係人口	概 要
①近居の者	その地域にツールがあり、近隣の市町村に居住する者
②遠居の者	その地域にルーツがあり、遠隔の市町村に居住する者
③何らかの関わりがある者	その地域にルーツはないが、過去のその地域での勤務や居住、滞在等の経験等を持つ者
④風邪の人	ビジネスや余暇活動、地域ボランティア等をきっかけにその地域と行き来する者

(出所)鈴木(2020)

なく、それ以上の関係がある人たちの存在がクローズアップされる（鈴木(2020)）。そのため、それらの人々をターゲットとするものであるかなど、地域デザインを行う当初において明確にしなければならないこともある。したがって、地域デザインを行う主体にとっては、どのような人々をターゲットとするかが重要である(石川(2020))。これを明確にせず、単に地域活性化や地域デザインに取り組んでも、戦略のない事業と同様の結果をもたらすだけである。わが国だけではなく、世界中で行われている地域活性化や地域デザインらしき取り組みは、多くの場合、その取り組み主体が、誰に向けて何を訴求するかを明確にせず、単に「やっている」だけということが多い。次節以降では、デザイン主体が何を誰にどのように訴求しているかを中心として、豊富に存在する日光市のトポスやコンテンツについて取り上げていきたい。

2 「日光」の地域資源

本節では、2022 年の夏季実態調査で訪問した「日光市」について取り上げる。行政区としての日光市は、いわゆる「平成の大合併」により誕生した。そこで日光市の概要について取り上げた後に、一般社団法人日光市観光協会が編集した『日光市周遊観光ガイドマップ』で取り上げている区分(地域・ゾーン)に基づいて、そのトポスやコンテンツである地域資源を整理したい。

(1) 日光市の概要

栃木県日光市は、県の北西部に位置し、北は福島県、西は群馬県に接しており、関東地方の市町村では、最も面積が広い地方自治体である。地勢としては、日光火山群と鬼怒川上流域、大谷川流域などに広がる区域である。その総面積は 1,449.83 ㎢であり、県土の約 1/4 を占めている。このようにかなり広い自治体となったのは、2006 年 3 月に、それまでの今市市、旧日光市、藤原町、足尾町、栗山村の 2 市 2 町 1 村が合併したことによるものである。同市の 2022 年 8 月時点における人口は、約 75,000 人である(日光市ウェブサイト)。こうして新しい日光市

ものではなく、他地域と比較しても質や量ともに恵まれているといっても過言ではない。たとえば、日光東照宮、日光山輪王寺、日光二荒山神社の建造物と境内地には、国宝、重要文化財が合計で 103 もあり、またそれらが位置するトポスの自然環境に恵まれている。観光客は、これらの建造物をゆっくりと見て歩いたり、世界遺産に登録されている建造物を掻い摘まんで見たりすることも可能である。こうした行動を選択できるのも日光の歴史建造物の特徴である。

3) 日光東照宮

日光の歴史的建造物の中でも世界遺産に登録されている「日光東照宮」は、江戸時代初期の彫刻・鋳金具・彩色など、工芸・装飾技術のすべてが集約されている。同建築物は、1617(元和 3)年に徳川秀忠が東照社(現日光東照宮)を建立し、父家康の御霊を久能山から遷座させた。同所は、地理的には江戸城の真北に位置しており、北方の守りを固める重要な場所としてとらえられている。現在の主な社殿群は、徳川家光による「寛永の大造替」により建替えられた建造物である。その境内には、国宝 8 棟、重要文化財 34 棟を含む 55 棟の建造物があり、極彩色の建物は荘厳な宗教的空間を創造している面がある。そのため歴史的な価値が認められ、社殿群は 1999 年には世界文化遺産に登録された(世界遺産アカデミー(2016)原田他(2014))。

日光東照宮の「陽明門」は、「平成の大修理」により、かつての極彩色の輝きが復活したとされる。同門の随所には、故事逸話や聖人賢人、君子などの彫刻が 500 以上も施されており、1 日中眺めていても飽きがこないことから「日暮れの門」という別名もある。また日光といえば、すぐに思い浮かぶのが、「三猿」である。神厩舎の長押に刻まれた猿の彫刻は、人間の一生を風刺したものであり、「見ざる、言わざる、聞かざる」は人生における渡世の基本を示しているとされる。さらに「唐門」は、御本社(本殿・石の間・拝殿)の入口としての役割を与えられている。同門は、日光東照宮では最重要の正門とされる。同門には、貝殻が原材料の塗料、古粉が施されており清楚な白が際立っている。したがって、写真を撮影するとその白さが際立ち、写真を撮影することを目的とする訪問者にとってはいわゆる「映える」写真を撮影することができる。

五重の塔は、1650(慶安 3)年に初代若狭小浜藩主酒井忠勝が奉納したと伝えられている。現在の塔は、江戸後期に再建されたものであり、高さは 36m あり、1 層から 4 層までが和洋であり、最上の 5 層のみが唐様建築という特異な建築様式である。また「眠り猫」は、徳川家康が眠る奥社に通じる東側の門の上に据えられた猫の木彫像である。これは伝説の名工・左甚五郎の作と伝えられている。日光東照宮内で「探す」という経験を観光客がする際には、この眠り猫がターゲットとなるかもしれない。「心柱」は、懸垂式(吊り下げ式)となっており、礎石から約 10cm 浮いている。こうした日光東照宮における著名な建築物や細工は、ここで取り上げただけでも

複数存在しており、その知名度だけでなく、そのストーリーの豊富さにも圧倒される。日光東照宮を中心としたトポスへは、とくに関東圏の小学校などでは、修学旅行で訪問することが多い。そこで小学生の頃に「三猿」の話を聞いたり、「眠り猫」を探したりした思い出や記憶は、その後、同トポスを訪問したり、テレビなどで見たりした際にはまず思い出す事柄となろう。こうして小学生時代に訪問した子どもたちが、その後の人生経験を重ね、異なった解釈ができるようになることで自らの成長・変化を体験することもできるきっかけとなるものである(原田他(2017) 諸上・小暮(2021a)(2021b))。つまりこうした体験が長期記憶となり、訪問者の心象に残ることになる。

4) 日光山輪王寺大猷院

「日光山輪王寺大猷院」は、徳川家光の霊廟である。同所には、壮麗な二天門や竜宮城を思わせる皇嘉門がある。家光は家康を尊敬していたと伝えられており、「死後も家康公に仕える」と遺言したため、その令を受けた4代将軍徳川家綱が建造したと伝えられている。また同所は、近世よりもかなり古い時代になるが、奈良時代には勝道上人が日光山を開祖し、四本龍寺建立が開始されたと伝えられている。また平安時代には、空海など高僧が来山し、関東の一大霊場となった。

輪王寺には、「三仏堂」があり、東叡山、比叡山と並ぶ大本山である。これは日光山内最大の木造建築物である。2019年には平成の大修理が終了した。全国でも珍しい天台密教形式の御堂もあり、日光山の総本堂であり、日光三所権現本地仏の本尊でもある。千手観音(男体山)・阿弥陀如来(女峰山)・馬頭観音(太郎山)三体の座像は、日本一の大きさを誇るものである。「大護摩堂」は、本堂(三仏堂)の裏手に所在しており、日光山輪王寺の中心的な祈祷道場である。「逍遙園」は、琵琶湖を模して作庭された庭園であり、江戸初期の大名茶人小堀遠州の作と伝えられている。「二天門」には、増長天と持国天が祀られている。同門は、世界遺産に登録されている日光の社寺のなかでは最大の楼門である。2019年3月には、風神・雷神の複製像が完成し、安置された。そして「夜叉門」は、4体の夜叉が安置されており、家光の霊廟を守っているとされる。牡丹が彫刻(牡丹門)、烏摩勒伽(破魔矢のルーツの弓矢を持つ)、犍陀羅(斧を持ち、憤怒の形相で威嚇)、毘陀羅(金の衣装と膝のナマズが特徴)、阿跋魔羅(緑の体に白虎の皮を巻く)があり、それぞれの夜叉には個別の役割が与えられている。観光客は、こうした4体の夜叉を見ながら、それぞれの役割を確認することは、各自の心象に個別のストーリーを形成する役割を果たすことになる(諸上・小暮(2020))。

5) 日光二荒山神社

「日光二荒山神社」は、日光の山岳信仰の中心として位置づけられている。同神社は、とくに関東の守り神として幕府・豪族の信仰を集めてきた。また1200年以上前には、先にもあげた勝道上人が二荒山(現男体山)に登拝し、本宮(現本宮神社)を建立したのが始まりとされる。主神の大己貴命(おおなむちのみこと)は、縁結びの神様としても知られている。とくに「御本社・滝尾神社・本宮神社」は、「日光三社」として聖地日光の原点である。山内にある御本社の社殿は、すべて重要文化財に指定されており、1619(元和5)年に創建された本殿は日光最古の建造物とされる。徳川秀忠が造営した優美な八棟造は、2020年に大規模修理が完了した。

また日光二荒山神社には、「縁結びのご神木」がある。これは日光二荒山神社の「縁結び」と関係しており、スギの木にナラの木が「宿り木」として生えている巨木である。そのため「すぎ(き)なら一緒に」という願いが込められている。さらに「神橋」は、聖地日光の表玄関の朱塗り橋であり、日光二荒山神社の建造物として位置づけられる。国の重要文化財にも指定されており、やはり1999年には世界遺産に登録された。その建築様式が特徴的なことから「日本三大奇橋」の1つにも数えられている(写真1)。現在は、年間を通して夕方から午後9時までライトアップされており、二荒山(男体山)をご神体とし、大谷川の清流に架かる状況を間近に見ることができる。観光客は、この橋を渡ることができないが、遠くからでも見えるため、自然の中にある人工物としても認識できる。そして「二荒霊泉」は、恒霊山からの「薬師の霊泉」、滝尾神社からの「酒の泉」の2水脈を引き込んだ御霊水である。これは健康や若返りの泉とされる。「大国殿(だいくぐでん)」は、全国でも珍しい幸運の「招き大国」が祀られている。そのため参拝者は「打ち出の小槌」を振り、願いごとをするのが通例となっている。こうした動作をすることにより、それぞれの願いをすることはもちろん、訪問者独自のストーリー形成に貢献する(心みちるたびウェブサイト)。

これまで日光東照宮、日光山輪王寺大猷院、日光二荒山神社について取り上げてきたが、これらの建造物では御朱印を受けることができる。とくに御本社の他別宮や末社が複数あるため、御朱印の種類も豊富である。最近は、高齢者の参拝客だけではなく、若年層の参拝者、さらに外国人の観光客なども御朱印帳を持参し、御朱印を押してもらう光景が多く見られる。こうした行動は、「スタンプラリー」としての楽しみ方ができるとも解釈すること



<写真1 神橋(筆者撮影)>

ができる。そのため御朱印を捺す神社や寺院側も、限定御朱印や特別御朱印など希少価値のある御朱印を施設側でも用意していることがあり、参拝者には何度も訪問する機会を創出している面もある。特別な日ということになるが、日光東照宮の春季例大祭や秋季例大祭は、それぞれ5月17・18日と10月16・17日に1年に2回実施されている。その際には、神事である「流鏑馬」の奉納や「百物揃千人武者行列」が行われ、多くの観光客が押し寄せている。とくにこうした特別な日には、外国人観光客も多く訪問しているようだ。

6) 日光と奥日光の自然

観光地のテーマとして取り上げられるものは複数存在するが、日光といえば、やはり「自然」がテーマとなることが多い。テーマというよりも当然（前提）となっている面もある。建造物を訪問せず、自然のみを満喫するために訪問する観光客や登山客・トレッキング客も多い。そこで豊かな日光の自然について取り上げる。また日光の自然を取り上げるときには、「日光」と「奥日光」に分けて取り上げることが多い。

日光の自然については、まず「憾満ヶ淵」が慈雲寺と地藏群のある大谷川の溪谷にある。その対岸には、日光植物園が所在している。また「裏見ノ滝」は、芭蕉の句「暫時は滝に籠るや夏の初」で知られており、「日光三名瀑」の1つに数えられる。「霧降ノ滝」は、上下2段に分かれている高さ75mの滝であり、これも日光三名瀑の1つに数えられている。人々は、とくに高所から水が落ちる滝に心躍らされる面がある。それはその大きさ(幅の広さ)、高さもさることながら、さまざまな形態や景色の中にある滝を見ることで達成される。その面では、観光客は日光には複数の滝があるため、さまざまな滝の姿に魅了されることになる。

次に奥日光では、「小田代原」が湯川西側に広がっており、湿原から草原に移行する段階に所在している。秋のミズナラの黄葉や草紅葉の景観は絶景である。「湯滝」は、湯ノ湖から流れ落



<写真2 中禅寺湖から男体山を望む(筆者撮影)>

ちる高さ70mの滝である。やはりその高さが自然の美しさを映し出している。また「湯ノ湖」は、三ツ岳の噴火によりできた湖とされる。その周囲は約3kmであり、約1時間で1周することができるため、そのコンパクトさが受容されているといえる。そしてあまりにも有名な「中禅寺湖」は、海拔1,269mという日本一の高さに所在する湖である(写真2)。春にはヤシオツツジ、秋に

は黄葉が見事である。

そして日光(奥日光) といえ、ば、「中禅寺湖」といわれるくらい同地を象徴する湖である。また中禅寺湖とセットで取り上げられる「華厳ノ滝」は、中禅寺湖の流出口にある高さ 97m の大瀑布であり、日本三大名瀑の 1 つに数えられる。その高さゆえにいくつかの事件もあったが、その事件がまた別のストーリーへと展開していくこともある。さらに「竜頭ノ滝」は、溶岩の上 210m を流れる滝であり、春にはトウゴウムツバツツジ、秋は紅葉が見事である。そして奥日光の秋の風景というよりも、わが国の秋の風景としてしばしば取り上げられるのが、「戦場ヶ原」である。男体山の噴火によって川が堰き止められ形成された湿原である。高層湿原、低層湿原、中間湿原とすべての種類の湿原がある。年間を通してではなく、特定の日ということになるが、「男体山登拝講社大祭」は山自体が信仰の対象であり、山頂には日光二荒山神社の奥宮が所在している。毎年 7 月 31 日から 8 月 7 日まで登拝祭が行われており、8 月 1 日の午前 0 時には山頂を目指しての登頂が開始される。こうした特定の日の特定の時刻という限定性が、人々を同地へと誘う動機となっている面がある。

7) 日光の食（グルメ）

多くの観光客が訪問先に対して期待するのは、その地特有の食(グルメ)であることが多い。食に関しては、観光地とセットとしてだけではなく、そのみで独自に顧客に訴求する場合もある。むしろその方が多い地域もある。それは食事で釣ることを忌避している面があるからかもしれない。日光での食は、「日光湯葉」が思い浮かぶ。湯葉はおいしくヘルシーであり、目でも楽しむことができ、懐石料理でも人気がある。そして「羊羹」は、日光のおいしい水でつくられている。その歴史も古く、かつては社寺への奉納の他、大名家・公家に進物として贈られていたという。また瑞々しい水羊羹も名物である。

8) 日光の温泉

日本では、古くから湯治を行ってきた歴史があるが、近年は病氣療養や疲れを癒やすだけではなく、各地の温泉をめぐり、その地で異なる湯を楽しむという傾向が顕著になった。したがって、どこかの温泉がよく治るというように温泉に何らかの解決を求めるのではなく、単純に楽しむことが主目的となってきた。日光にある温泉も、「日光の湯を楽しむ」ことを目的に訪問する観光客が増えている。

そこで「奥日光湯元温泉」は、これまで何度も出てきた勝道上人が発見したとされる。同温泉では、湯煙の向こうに湯ノ湖や山々の景観を臨むことができる。「中禅寺温泉」は、中禅寺立木観音、二荒山神社中宮祠や華厳ノ滝の名所旧跡がある中禅寺湖畔にある観光地に所在してい

る。奥日光湯元温泉から引き湯をし、約 78 度の源泉が 12km の道のりを移動して適温になるとされる。こうした適温に至る過程も重要であるかもしれない。

9) 日光の土産

人々は、観光や仕事において訪問した場所では、しばしば土産を購入することが多い。また土産を購入し、それを他人に渡す行動を取るのは日本人に多いとされる。日光でも他の地域では販売していない独特の土産物がある。「日光彫」は、東照宮を造営した際に全国から集められた名匠の余技によって誕生したとされる。これには「ひっかき」という独特の彫刻刀を使用し、主に植物などの模様が描かれる。「日光下駄」は、神官・僧侶の正式な履物であった御免下駄を実用的に改良したものである。竹の皮で編んだ草履表があるなどさまざまな特徴もある。このように食以外の土産物は、やはり日光ならではの歴史性や場所性が顕著にあらわれているといえる(大后(2018)山本(2019)KOGEI JAPAN ウェブサイト)。このように日光ならではの事物は、多様に存在していることがわかる。

3 「足尾」の地域資源

多くの人が、「足尾」と聞いて思い浮かべるのは「足尾銅山」であろう。これは小学校の教科書の中で、足尾銅山からの煤煙や鉛毒が流れた渡良瀬川流域の住民が大きな損害を被ったことにより、その状況改善を天皇に直訴した田中正造という人物とともに語られるためである。したがって足尾は、足尾銅山という銅の産出による産業遺産として光が当てられる面、一方でその影の面が人々の心の中に描かれている。

(1) 産業遺産と環境のまち

日光市の地域(ゾーン)はいくつかに区分することができる。これらの区分は、明確に決まっているわけではないが、行政を執行しやすい単位や天気予報などのために便宜的に区切られているように、大きな山河があり、天候に大きな影響がある場合などは、それが 1 つのゾーンとなる場合もある。また交通機関の便などもそれに影響しており、しばしば「沿線」という形で区切られることもある。したがって、こうしたゾーンの区切りは、行政区以外はほぼ誰かがある時点で恣意的に区切った場合が多いようである。足尾地域についても、そのゾーンとしての形成過程はいろいろ指摘されているが、本稿で基本としている『日光市観光マップ』で区切られていることを尊重したい。

1) 足尾と足尾銅山

足尾地域は、「銅山のまち」として江戸時代から昭和にかけて約 400 年の歴史を有しており、銅山により繁栄した頃の面影を現在に止めている。そのため、まち全体が近代産業発祥の頃を物語る博物館ともいえる。かつては、銅を採掘する際に発生した煤煙や鉱毒が渡良瀬川に流れたことにより、自然環境に大きな影響が出た。しかし現在では、失われた自然環境の回復に注目されるようになっている。また多くの産業遺産が点在していることでも知られる。

足尾銅山は足尾の象徴である。同銅山は、慶長 15(1610)年に銅山が発見されて以降、幕府の管轄下におかれ、労働者が採掘と製錬を行ってきた。江戸中期には「足尾千軒」と呼ばれ繁栄した地域でもある。足尾銅山を地域ととらえるか、冒頭であげたように場所(トpos)ととらえるかについては、議論があるかもしれない。ここではどちらであるかを判断しないが、後段においてどちらでとらえるかという問題は浮上する。同銅山は、江戸時代後期にはしばらく衰退したが、明治 10(1877)年には古河市兵衛が経営に乗り出し、先進的技術と新しい設備導入によって生産量が急増した。そして明治 20(1887)年代には、わが国において産出される銅の 40%を占めるほどの銅山となった(日本一)。また近代化を進めたわが国の産業を支える礎の 1 つとして数えられるようになった。ただ昭和の時代になると、産銅量の減少と時代の流れによって衰退し、昭和 48(1973)年 2 月 28 日にその長い歴史に終止符が打たれた。同銅山は、わが国の近代産業の先駆けであり、数多くの貴重な産業遺産が残存している。最近では、銅山の発達に伴う煙害によって破壊された自然環境が再生されている状況が注目され、緑の再生に向けた積極的な取り組みが注目されている。

2) 足尾銅山遺構

足尾銅山の遺構として数えられる場所やモノは複数存在する。「旧松木村跡」は、松木地域は中世以来 3 村で形成されていたことを後世に伝えているトposである。しかし、明治 17(1884)年に建設された直利橋製錬分工場から排出された亜硫酸ガスの影響や山林の乱伐や大火によって住居が減少し、明治 35(1902)年には廃村となった。この廃村となった跡がある。「愛宕下カラミ煉瓦防火壁」は、明治 40 年代から造られた製錬所の社宅(赤長屋)であった。建物横には防火壁が造られ、延焼を防止しようとした。壁の材料は、銅を製錬する際に出る鉄分を多く含む副産物であるカラミを型に流して固めたものであり、そのためカラミ煉瓦防火壁といわれている。「龍蔵寺・旧松木村無縁塔」は、日光山輪王寺を本寺とする天台宗の寺院である。ここには坑夫の墓や廃村となった旧松木村の先祖の無縁塔が多く残存している。そして「製錬所大煙突」は、大正 8(1919)年に建設されたものである。高さは約 50m あり、直径下部約 6m、上部約 4m もある大煙突であり、製錬所のシンボルといえるものである。

このように足尾銅山遺構に数えられる場所やモノを概観すると、それぞれがトポスとなっており、それらをまとめて足尾銅山という地域(ゾーン)が成立していることがわかる。このように考えると、足尾銅山(遺構)はゾーンであり、旧松木村跡や愛宕下カラミ煉瓦防火壁などはゾーンを構成するトポスであることがわかる。



＜写真 3・4 足尾銅山遺構(筆者撮影)＞

3) 足尾銅山周辺観光

足尾銅山というゾーンを取り巻く周辺にも、全体として足尾銅山を形成したさまざまなトポスが存在している。現在、観光や修学旅行など学習向けに足尾銅山坑内の一部が公開されている(写真 3・4)。実際に筆者もトロッキ列車に乗り、坑道内のほんのわずかの距離を走行した。過酷な坑道内での労働は想像することはできなかったが、近代化遺産の一部に触れた経験は、単に話を聞くだけではなく、わずかの経験がさまざまなストーリーを形成するきっかけとなることが実感できた。

それ以外に足尾銅山を形成した周辺のトポスが多く存在している。「古河掛水倶楽部」は、足尾銅山の隆盛時において、古河鉱業が明治 32(1899)年に建築した洋館である。同倶楽部は迎賓館として使用され、華族や政府高官を招いた際には、接待や宿舎として使用された。また館内には大正 13(1924)年製のピアノがあり、国産第 1 号とされるビリヤード台もある。ここは平成 18(2006)年には国の有形文化財に登録された。「有越索道塔」は、町中央の通洞選鉱場の裏山に聳える高さ 18m と 25m の塔である。通洞選鉱場から出される廃泥を有越や水山堆積場まで運搬するために造られた索道の支柱である。「掛水赤煉瓦倉庫」は、書庫や物品収納として使用した赤煉瓦造の建造物などが点在することで形成されている。掛水倶楽部前の建物は、重要書類等を収納していた鉱業所事務所の 2 階建の倉庫である。

足尾駅周辺では、「掛水住宅」は中央に足尾鉱業所所長の住宅(「掛水役宅」)が所在したが、

その他に各部署の幹部職員が居住する社宅があった。これは現在も当時の佇まいを残したままである。「古河橋」は、明治 23(1890)年に完成した橋である。ドイツ人の設計による長さ 50m、幅 4.6m のトラス式の鉄橋であり、わが国に現存する道路用鉄橋の中でも古いものの 1 つに数えられている。「本山鉾山神社」は、明治 22(1889)年に銅山の繁栄を願い、坑長以下、本山に働く抗夫一同の寄進によって 3,279 円 53 銭が集められ、造営された神社である。銅山に関わる多くの人々は、神社を中心として銅山の繁栄を願い、毎年、山神祭が行われてきた。その造営経緯からも同神社は人々の生活と一体化していることがわかる。「本山製錬所跡」は、常にわが国に所在する製錬所における先端の精錬法を創造してきた製錬所である。また国内だけでなく、世界からも注目されていた。しかし、昭和 48(1973)年 2 月に閉山したのちは、輸入鉾石製錬等を行っていた時期もあったが、平成元(1989)年には完全に停止された。「間藤水力発電所跡」は、明治 23(1890)年に建設された水力発電所である。ここで発電された電力は、坑内電車・揚水機・電灯などに利用されていた。現在は、煉瓦造の基礎と直径 1m の鉄管の一部が残存しているのみである。

「銅親水公園」には、栃木県初の人道用の斜張橋「銅橋」があり、また銅山の歴史や自然の大切さを学ぶことができる「足尾環境学習センター」がある。「小滝の小滝」は、銅山の下のカープ(銅山の曲り)から見える小さな滝であり、これは地名の由来にもなった。すぐに下の山岳橋からの眺めが非常によいとされる。「小滝坑口」は、昭和 29(1954)年まで使用されていた坑口であり、明治 18(1885)年に旧坑道を取りつけてから約 70 年間にわたって銅を産出していた。「小滝浴場跡」は、坑内での作業を終えた抗夫たちが汗と汚れを落としていた浴場の跡である。「小滝の里」は、小滝地域の中心であり、昭和 29(1954)年に小滝坑が廃止され、その全施設が撤去された。昭和 39(1964)年には、当時の住民が記念碑を建立した。「足尾キリスト教会」は、イギリスの鉾山王グリーン・ビビアンが世界各国の首位鉾山所在地に教会を建設することを行っていた経緯があり、そこでわが国では足尾銅山が選択された。そして、明治 41(1908)年に献金された建設資金 2,500 円によって建設された。「波之利大黒天」は、勝道上人が中尊寺湖畔で修行中、毎年白鼠が穂をくわえていたため、鼠の足にひも(緒)を結び、その後を追っていくと足尾の現在における大国橋畔の洞穴へ入っていったという。そのためその場所に波之利大黒を刻み、この地を足尾と名付けたといわれる。「猿田彦神社」は、勝道上人が 1,200 年前に建立した神社である。

以上のように足尾銅山周辺には、多くのトポスがあり、現在もその跡が残っているものや現在もほぼその全貌をとどめているもの、他方で単なる「跡」であり、そこに何が所在したかを確認できないトポスまで幅広く残存している。こうしたトポスの全体、あるいは一部によってゾーンが形成されている。

4) 足尾銅山に関係する人物

前項では、足尾銅山周辺に所在するトポスを取り上げた。ZTCA デザインモデルにおいては、トポスやゾーンにおいてさまざまな活動をしたり、働きかけを行ったりする人物（アクター）やつながりを「アクターズ・ネットワーク」として重視している(原田(2014))。そこで足尾銅山に関係したアクターについて取り上げる。

「古河市兵衛」(1832-1903 年)は、天保 3(1832)年に京都の造酒屋の次男として誕生した。若年の頃から商才があり、生糸貿易に手腕を発揮したとされる。その後、鉱山経営に乗り出し、草倉銅山(新潟県)、赤柴銅山(長野県)、幸生銅山(山形県)など各地の銅山を経営した。そして先に取り上げたように、明治 10(1877)年に当時経営不振であった足尾銅山を購入した。その経営を引き継ぐにあたっては、陸奥宗光の協力や渋沢栄一の資金援助を受けて開発を行ったとされる。また彼は、新技術の導入や近代化経営を積極的に図り、明治 20(1887)年には、わが国の全鉱産出量の 40%を占めるに至った。古河は後年「日本の鉱山王」とも呼ばれるようになった。

同様に先にも少しふれた「田中正造」(1841-1913 年)は、栃木県佐野市小中町(旧旗川村)の名主の家に誕生した。彼はまず区会議員となり、県会議員、そして衆議院議員になった。衆議院議員になって以降は、足尾銅山の鉱毒問題を繰り返して国会で追求した。ただ政策において改善が見られないため、明治 34(1901)年には、この問題を天皇陛下に直訴した。その後政府は、渡良瀬川下流に鉱毒を受け止める貯水池設置のために谷中村を強制的に廃村とし、ここを遊水池(現渡良瀬遊水池)とした。彼はこうした政府の手法を不服とし、谷中村に移住し、農民と村の貯水地化に対して反対運動を継続した。政府による住居強制破壊の後も、死去するまで谷中村を離れることはなかった。田中がこうした信念のアクターであったことが語り続けられることにより、銅山が近代日本の一助となった面だけでなく、影の面も映し出している。また銅山全体のストーリーに対する評価を読者だけでなく、訪問者にも委ねることになっている。とくに訪問者にとっては、ダークツーリズムやグレーツーリズムと呼ばれる訪問となる可能性もある(ダークツーリズム・ジャパン編集部編(2016)岩崎(2018))。こうした産業遺産の影の部分に光を当てることが学びの 1 つであり、訪問者のこれまでとは異なったコンテキスト形成に貢献する面もある。

5) 足尾銅山周辺の自然

足尾銅山では、かつては銅の採掘により発生した煙害や流出した鉱毒が大きな問題となったが、現在はそうした状況は大きく改善され、観光客にとっては豊かな自然を楽しめる場所・地域となっている。「わたらせ渓谷鉄道」は、渡良瀬川沿いの自然を満喫できる鉄道である。桐生～足尾～間藤駅を繋いでいる鉄道である。現在は、「日本で一番乗ってみたいローカル線」とし

でも有名である。「備前楯山」は、足尾銅山発見の山である。その標高は1,273mである。元黒岩山は、1610年に備前国の農民2人が銅鉱を発見したことにより、備前楯山と名付けられた。現在は登山口の舟石峠からは、遊歩道が整備され、山頂から270度の眺望が広がり、日光山系男体山や袈裟丸山などの山容が見える場所である。また気軽なトレッキングコースでもある。

「松木溪谷」は、特異な景観を有している。切り立った岩壁や天を衝くような岩稜は、他ではあまり見ることができない景色である。かつては、足尾銅山の煙害や山火事などにより緑が失われた山肌は、砂防工事が施されたり、ボランティアが植樹をしたりするなどし、少しずつ緑が回復している。「庚申山」は、『南総里見八犬伝』にも出てくる信仰の山である。奇岩怪石と原生林が続く山であり、頂上からは雲海を眺められる。標高は1,892mである。同山は、古くから信仰の山として知られており、江戸時代の道標や石碑が残存している。また「関東ふれあいの道」として登録されており、登山道が整備されている。「皇海山」は標高2,144mである。群馬県境に位置しており、足尾連山の主峰である。「日本百名山」の1つに数えられ、登山ルートも多方面のルートがある。

さらに「ニホンカモシカ」は、岩山に生息している国の天然記念物である。その体高は約70cm、体重30～40kgである。雄雌ともに黒色の短角をもっている。わが国特有の貴重な草食動物であり、昭和30(1955)年には特別天然記念物に指定された。「コウシンソウ」は、足尾のシンボルといえる希少植物である。庚申山の岩場にごく一部に自生しており、毎年6月中旬頃には、薄い紫色の可憐な花を咲かせる。その群生地は、特別天然記念物に指定されている。「足尾温泉」は、銀山平公園に湧く温泉である。肌によいため「美肌の湯」と呼ばれる。

このように足尾地域は、足尾銅山を中心として数多くのトポスに恵まれ、そこで足尾地域にかつて尽力した古河市兵衛や田中正造という全く異なった関わり方をしたアクターにより、つながれたゾーンでもある。また銅山での採掘活動が行われていた時期、その後採掘が行われなくなり、元の自然が回復される中、その姿を変えてきたゾーンでもある。そのため、時間経過により、ゾーンやトポスとしての位置づけに大きな変化があった地域といえる。

4 「鬼怒川・川治」「湯西川・川俣・奥鬼怒」の地域資源

これまでも取り上げてきたように、日光市のゾーンはいくつかに区切られているが、「鬼怒川・川治」「湯西川・川俣・奥鬼怒」もそれぞれ区切られたゾーンである。これら2つのゾーンは、主に自然を中心として、観光客に訴求することが中心である。またこれらの場所(トポス)を耳にすると、すぐに「温泉」が思い浮かぶことから、一種の体験や経験を訪問者には提供する地域としての側面もある。

(1) 鬼怒川・川治

1) 鬼怒川・川治の建築物と自然

鬼怒川・川治では、「鬼怒楯岩大吊り橋」は鬼怒川温泉街と名勝の楯岩を結ぶ歩行者専用のつり橋である。大吊り橋は、全長 140m あり、高さ 37m である。その頂上からは、鬼怒川溪谷の絶景を眺めることができる。また「龍王峡」は、鬼怒川・川治温泉随一の景勝地であり、絶景である。龍王峡という名称は、その光景が龍がのたうつようなところからつけられたとされる。

「鬼怒川温泉駅転車台」は、東武鬼怒川線下今市駅～鬼怒川温泉駅間を結んでいる後者の駅に所在している。SL「大樹」の運転日には、SL 編成車両の入れ換え作業を間近に見ることができる。これは SL ファンにとっては、垂涎の光景となる(宮脇(2020))。

2) 鬼怒川・川治の温泉

鬼怒川・川治といえば「温泉」である。したがって、これらのゾーンにはさまざまな温泉がある。とりわけ「鬼怒川温泉」は、江戸時代に発見され、かつては日光詣の諸大名や僧侶のみが入ることを許された温泉であった。現在は、鬼怒川沿いに旅館が建ち並び、あらゆる人々が楽しめる温泉地となっている。「鬼怒太の湯(足湯)」は、鬼川温泉駅前にあり、到着時や帰り前のひとときの癒やしとして利用されている。「鬼怒子の湯(足湯)」は、くろがね橋の袂にある足湯である。この足湯からは、鬼怒川の絶景を眺めることもできる。「鬼怒川公園岩風呂」は、鬼怒川公園の裏手に所在する公共の温泉施設であり、内湯と庭園風の露天風呂がある。

「川治温泉」は、鬼怒川と男鹿川が合流する溪谷に開けた山間にある静かな温泉郷である。露天風呂「薬師の湯」では、男鹿川の流れを堪能することができる。また露天風呂や内湯があり、低温サウナなどの施設も完備されている。「かわじいの湯(足湯)」は、川治ふれあい公園内にあり、やはり男鹿川のせせらぎを眺めながら入ることができる。さらに「結びの湯(足湯)」は、縁を結ぶ円形に作られた足湯である。

訪問者が同所を訪れ、体験できることの 1 つに「川治温泉道祖神巡りスタンプラリー」がある。昔から親しまれてきた道祖神や川治温泉のキャラクターである「かわじい」をモチーフとした道祖神 3 体をめぐることによって、開運を願うことを主としている。また「鬼怒川温泉七福邪鬼めぐりスタンプラリー」は、約 7km の距離があり、約 2 時間の散策をしながら楽しむことができる。とくに各橋の袂などにあり、邪鬼を払い、福を招くといわれる「鬼怒太」「鬼怒子」の胸像をめぐるスタンプラリーである。こうしたスタンプラリーは、先の寺社をめぐり「御朱印」を受けることと通じるものがある。つまり、訪問者に複数のトポスに足を踏み入れてもらうことにより、提供(企画)する側の思いと提供される側の思いがシンクロする場面でもある。近年は、特定のトポスのみを訪問するのではなく、こうした複数のトポスを訪問する周遊型で

あり、全体としてそれらトポスが含まれるゾーンを経験してもらうことを意図した地域が増えているようだ。

(2) 湯西川・川俣・奥鬼怒一野趣あふれる伝説の里

湯西川・川俣・奥鬼怒は、歴史のベールに包まれた伝説の山里であり、訪問者は非日常のゆっくりとした時間の流れを経験することができるゾーンである。とくに湯西川・川俣・奥鬼怒は、関東屈指の秘境の地とされる。

1) 湯西川ゾーン

湯西川ゾーンには、壇ノ浦の源平合戦に敗れた平家一門が隠れ住んだという伝説が残っている。約 400 年前、平家の子孫が湯西川の河原において大雪の日でも全く雪が積もらない不思議な場所を見つけたとされる。そこが源泉であったという。ゾーン全体として平家一門が息を潜めて暮らしたという名残が、さまざまな所に見受けられる伝説の温泉地として位置づけられる。

「平家の里」は、平家の人々の生活様式を後世に残すため、村内の茅葺き屋根の民家を移築して再現した民族村である。とくに「平家落人民俗資料館」は、平家の落人がこの地に追われた当時を偲ばせる武具や着物など、宝物や当時から伝わる書物や生活品などを展示している資料館である。「平清盛公御神木」は、平家の里前の森林公園内に聳える大木である。平家の人々が湯西川を安住の地と定めたときの記念樹と伝えられている。「高房神社」は、湯西川に上社、下社の 2 ヶ所があり、氏子の安全と五穀豊穡を祈願する神社である。これらの社に刻まれている彫刻は見事である。「三十三観音堂」は、部落の守護物として長く信仰の対象となってきた。ここには 33 体の観音が一堂内に祀られている。「湯西川水の郷」は、源泉掛け流しの露天風呂や足湯などが人気を集めている観光センターである。同郷では、清流沿いに大吊り橋や遊歩道などが整備され、観光農園や湯西川暮らし館なども併設されている。またそば打ち体験をすることもできる。「水陸両用バス」は、湯西川ダムの見学などの際に利用される。そして食としての「いろり料理」は、平家伝説が残る湯西川の名物である。川魚・鹿肉などを囲炉裏で焼いて食べる野趣豊かな郷土料理である。

2) 湯西川ゾーンの自然

湯西川ゾーンは、緑豊かな溪谷に代表される。切り立った岩壁の間を切り裂くような鬼怒川の流れがあり、四季の雄大な景観を楽しめる山間にある湯量豊かな温泉郷である。また「川俣湖」周辺や溪谷沿いには多くの温泉宿が点在している。その付近には、瀬戸合峡はじめ、間欠泉、川俣湖など見所も多くあり、新緑や紅葉の頃は格別とされる。

「瀬戸合峡」は、「とちぎの景勝 100 選」の 1 つに数えられている。展望台や「渡らっしゃい吊り橋」からの景色は絶景である。その深度は 100m あり、切り立った岩壁は、約 2km にわたる川俣川の溪谷である。「間欠泉」は、川俣温泉の噴泉橋の真下にあり、40~50 分ごとに高温泉の湯柱を 20~30m 吹き上げている。鬼怒川に架かる噴泉橋の袂には、河原の岩と岩の間から勢いよく熱湯が吹き上がっている。「鬼怒沼」は、標高 2,040m の湿原に大小 48 の沼が散在している。日本一の高層湿原であり、チングルマやヒメシャクナゲなどの高山植物が自生している。また水源のない不思議な沼でもある。「川俣湖」は、瀬戸合見晴休憩所や川俣大橋からその景観を楽しむことができる。さらに 4 月から 9 月までは、イワナやヤマメ、ニジマス、ヒメマスなどの釣りを楽しむことができる。そして、10 月の紅葉の湖も見応えがある。このように湯西川ゾーンは、寒い一時期を除いて、多くの人がそれぞれの楽しみ方をすることができるゾーンである。

3) 点在する多くの温泉

日光湯西川地域は、豊かな自然の中を流れる湯西川の源流域である。周囲の山々に降り注いだ雨が森に蓄えられ、それがゆっくりと流れ出している。その水が集まって湯西川となり、下流の大地を潤している。湯西川水の郷は、湯西川ダム建設で水没する地域にあり、水源地域のシンボリック施設である。先にもあげたように「湯西川温泉」は、平家の落人伝説の残る歴史と大自然に囲まれた温泉地であり、溪谷や山々を眺めながら名湯を満喫することができる。「川俣温泉」は、川俣湖上流の山間にあり、大自然の景観を楽しめる秘湯である。秘境の温泉郷にふさわしい景観が広がる山間の温泉である。また多くの宿が溪谷沿いに点在している。「奥鬼怒温泉郷」は、登山道沿いにあり、奥へ行くごとに温泉宿が所在しており、深い山々と原生林に囲まれた泉質の異なる 4 つの秘湯が点在している。「加仁湯、手白澤温泉、日光澤温泉、八丁の湯」というそれぞれ泉質が異なっている 4 つの秘湯がある。これらの温泉は、昭和初期にツルハシで手掘りをした野天風呂が原点とされる。

奥鬼怒温泉郷へは、一般車両は乗り入れることができず、同温泉郷の宿へ行くには宿の送迎か徒歩でアクセスするしか方法はない。そのため訪問者は、どこまでも続く原生林の中を野鳥のさえずりを聞きながら、鬼怒川の源流沿いを歩いて訪れることになる。そして夜になると、露天風呂からは満天の星を眺めることができる。さらに高山植物の宝庫であり、鬼怒沼へのトレッキングもできる。宿の送迎により車で現地に行く以外に、徒歩での宿までの行程は、そのアクセスにかかる時間と周辺の自然環境により、訪問者の日常を忘れさせるに十分な時間になるだろう。

5 「今市－街道と宿場町」の地域資源

(1) 以前から存在した地域資源

いわゆる「平成の大合併」以前は、現在の日光市に含まれる「今市市」が存在していた。そのため、今市という地名やゾーンにさまざまな思いを抱く人が多い。筆者にとっては、30年以上前に杉並木を二輪車で走行し、日光東照宮に行ったことある。当時の今市市は、「日光の前座」的位置づけであり、それが再度訪問するまでそのイメージが継続していた。しかし、新しい日光市に今市市が含まれてからはかなりの時間経過があるため、かつてもたれていたのとは異なるイメージを抱く人々も多くなった。そこで前節までと同様、この地域(ゾーン)の地域資源について取り上げる。

「杉並木公園」は、日光杉並木街道の保護と地域文化を継承するために造られた公園である。水路が流れる公園内には、水車や報徳仕法農家を再現した古民家が所在している。「報徳二宮神社」は、二宮尊徳を慕い、1898年に創建された神社である。「道の駅日光街道ニコニコ本陣」は、世界遺産に指定されている日光の社寺や鬼怒川・川治温泉などへの玄関口となる場所に開設された。また「音楽」をテーマとした「船村徹記念館」と、栃木や日光の農産物・土産、日光の美味ごちそうも楽しめる複合施設である。先にも少しふれたSLの「大樹」は、東武鉄道下今市駅～鬼怒川温泉・東武日光駅間を毎日運行している列車である。SLは里山に汽笛を響かせ、杉並木や橋梁を走行している。そして、下今市駅改札構内にあるSL展示館には、東武線のSLに縁のある多様な展示物があり、転車台広場ではSL編成車両の入れ換え作業や、機関庫内での点検・準備中のSLをガラス越しに間近で見ることができる(国土交通省(2005))。

また「六法沢」は、長さ290mの六法沢橋から、栗山ダムや筑波山などを望む雄大な眺望が得られる。「大笹牧場」は、その面積が362haあり、全国屈指の広さを誇る牧場である。同牧場では、新鮮な牛乳を使ってアイスクリームづくりなどが体験できる。そして、当該地域の土産物としては、「たまり漬け」は味噌や醤油などのたまりで漬け込み、今市では定番の食とされる。さらに「今市の酒」は、今市自体が清流の宝庫でもあることから、おいしい地下水を使った地酒が今市の名物である。「日光そば」は、地粉と日光山麓のおいしい水でつくられる。漬け物や清酒、そばなどは、わが国のどこを訪問してもその形状や味はやや異なるものが多数存在している。これらはそもそも一般の「日本食」に位置づけられるものであり、特段「今市の・・・」ということではない。ただこのようにかつて今市市として、街道や宿場町として繁栄した地域では、その往来を支援する施設や他の地域をつないでいた交通機関、その上で地域に居住する人々や訪問する人々をもてなしてきた食が豊富であることは間違いない。

(2) 人々をもてなすための新しい資源

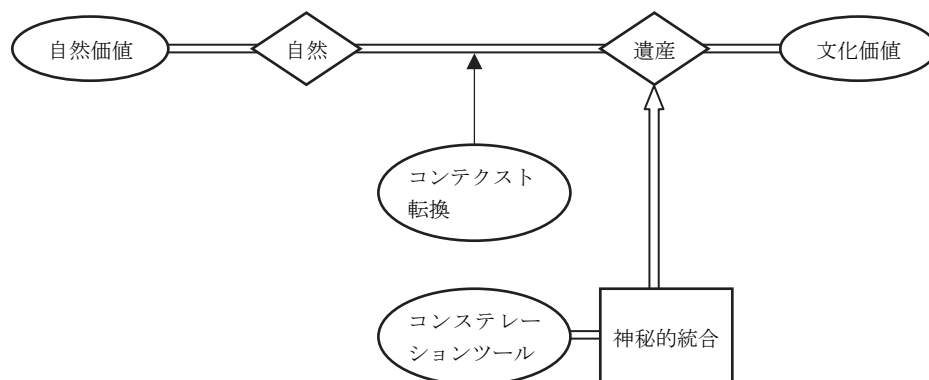
地域においては、観光客・訪問者、インバウンド、関係人口など多種多様な人々を受け入れるための施設も多くある。これらは旧来の施設や自然だけではとらえきれない顧客をターゲットとして誘客しようとするものである。また旧来の施設・自然を楽しむ人々と一緒に訪問する子どもをターゲットとし、幅広く当該地域を受容してもらおうとする施設としても位置づけられかもしれない。

日光において、テーマパークとしてとらえられるものには、「巨大迷路パラディウム」や「とりつくあーとびあ日光」「日光江戸村」「東武ワールドスクウェア」などがある。また栃木県といえば、そのブランド名としても有名である「とちおとめ」など莓が訴求されるが、それらの「いちご狩り」を体験する農園が複数ある。さらにこれまで個別に取り上げてきたゾーンを繋ぎ、短時間で自然を満喫できる「鬼怒川ライン下り」は、鬼怒川の溪谷美と四季の豊かな自然を船頭の巧みな櫓さばきによって体験することができる。こうした施設やアクティビティは、訪問者に近世・近代から現在という時空間を結びつける要素としても把握できよう。

おわりに

本稿では、地域(ゾーン)におけるトポスやコンテンツの発見・整理と、それらによるコンテキスト形成を中心として取り上げた。とくに夏季実態調査で訪問した日光市は、他地域と比較にならないほど豊富な地域資源があり、それにより複数のコンテキストが編集される可能性について、さまざまな角度から考察した。考察にあたっては、地域デザイン学会が提唱しているZTCA デザインモデルを基軸とし、トポスの発見・整理をし、それをゾーンとしてまとめ、そ

＜図表 3 コンテキスト転換による価値発見＞



(出所) 原田他(2019)

れらに関わるアクター、さらにそのネットワーク(アクターズネットワーク)の全体図を描写することを試みた。そこではさまざまなゾーンが浮上したが、それが 1 つの星座(constellation: コンステレーション)として確定し、観光やビジネスで当該地域を訪問した者だけではなく、それ以外の人々にもコンステレーションとして提示できる可能性について言及には至らなかった。ただ図表 3 にあるように、日光市に所在する自然や遺産がそれぞれ自然価値、文化価値として認識され、自然や価値により形成されるコンテキストにより、新しい結合としてのコンステレーションの形成が期待される。

また本稿は、(一) 日光市観光協会が整理している日光市を 8 地域(ゾーン)に区分していることを前提として、既に世界遺産となっている遺産、建造物、自然、食、そして強い影響を与えた人物について取り上げた。こうした抽出方法は、その抽出を行った主体により異なった取り上げ方をすることがある。しかし、同協会が抽出しているモノ・コトは、多くの人々が同意・受容されるものがほとんどである。それだけに日光は、わかりやすいゾーンという考え方もできるかもしれない。果たしてそうなのであろうか。多くの人が、「日光といえば・・・」は、同意していても、それを訪問者(期待者)にインパクトのあるものであり続け、再度の訪問を促し、当該ゾーンの商品を購入することにつながらなければならない。多くの観光地は、一度の訪問や購買ではなく、繰り返し訪問・購買することを期待している。その際には、やはり訪問者や購買者の記憶に長期記憶として残り、機会あるごとに思い出し、再び訪問・購買してもらえる状況をつくり出さなければならない。そのためには、しっかりとした地域デザインを描き続ける必要がある。

＜参考文献＞

- 青山忠靖(2019)「沓岐における地域プロデュース人材養成教育プロジェクトの実践―地域デザインプロセスを応用した教育プロジェクトの報告―」『事業構想研究』第 2、37-43
- 石川和男(2020)『現代マーケティング論』同文館出版
- 一般社団法人日光市観光協会『日光観光マップ』
- 岩崎久志(2018)「現象学的アプローチにおけるインタビューの検討―ライフストーリー研究を参照にして―」『流通科学大学論集―人間・社会・自然編―』第 30 巻第 2 号、87-101
- 上野和彦(2010)「地場産業研究の課題」『学芸地理』東京学芸大学地理学会 65 号、3-10
- NPO 法人世界遺産アカデミー監修、世界遺産検定事務局著 (2016)『すべてがわかる世界遺産大辞典(下) 世界遺産検定 1 級硬式テキスト』NPO 法人世界遺産アカデミー／世界遺産検定事務局
- 大森禰(2015)『『地方創生』でなく『地域創生』を』『自治日報』2015 年 1 月 13 日号

- 大森寛文・片野浩一・田原洋樹(2020)『経験と場所のブランディングー地域ブランド・域学連携・ローカルアイドル・アニメツーリズム』千倉書房
- KOGEI JAPAN ウェブサイト：https://kogeijapan.com/locale/ja_JP/list/(2023.1.10 確認)
- 国土交通省総合政策局観光資源課・経済産業省商務情報政策局文化情報関連産業課・文化庁文化部芸術文化課(2005)「映像等コンテンツの制作・活用による地域振興のあり方に関する調査」平成 16 年度国土施策創発調査報告書
- 心みちるたびウェブサイト：<https://icotto.jp/presses/3232>(2022.11.20 確認)
- 小林哲(2016)『地域ブランディングの論理』有斐閣
- 佐藤泰裕・田淵隆俊・山本和博(2011)『空間経済学』有斐閣。澤田道夫(2020)「地方創生再考ー「消滅可能性」の克服に向けた一視点ー」『アドミニストレーション』第 27 巻第 1 号、51-61
- 嶋田暁文(2016)「「地方創生」のこれまでと自治体の現在ー求められる自治体の「軌道修正」ー」『地方自治ふくおか』60 号、21-43
- 鈴木雄大郎(2020)「第 2 期まち・ひと・しごと創生総合戦略を読み解く」『地域経済アラカルト』44-47
- 大后治雄(2018)「地方自治体の産業振興における中小製造業の役割に関する一考察ー2001 年から 2013 年における 10 市区の製造業付加価値の滞留率算定を通じてー」『自治科学』Vol.31-2、73-78
- ダークツーリズム・ジャパン編集部編(2016)『DARK tourism JAPAN 産業遺産の光と影』東邦出版
- 電通 abic project 編、若林宏保・徳山美津恵・長尾雅信著(2018)『プレイス・ブランディング』有斐閣
- 原田保(2013)『地域デザイン戦略総論ーコンテンツデザインからコンテキストデザインへ』芙蓉書房出版
- 原田保(2014)「地域デザイン理論のコンテキスト転換：ZTCA デザインモデルの提言」地域デザイン学会編『地域デザイン』第 4 号、地域デザイン学会、11-27
- 原田保(2020)「地域デザイン理論のコンテキスト転換ーZTCA デザインモデルの提言」地域デザイン学会誌『地域デザイン』第 4 号(改訂版)、11-27
- 原田保・浅野清彦・庄司真人編(2014)『世界遺産の地域価値創造戦略：地域デザインのコンテキスト転換』学文社
- 原田保・石川和男・小川雅司編(2019)『地域マーケティングのコンテキスト転換：コンステレーションのための SSR モデル』学文社

- 原田保・石川和男・西田小百合(2021)「ゾーンのトレースとカテゴリーとの連携によるデザインメソドロジーの進化方向ー地域価値発現のための ZTCA デザインモデルのさらなる活用のために」地域デザイン学会誌『地域デザイン』第 17 号、11-66
- 原田保・古賀広志(2013)「「海と島」の地域ブランディングのデザイン理論-ZCT デザインモデルによるドラマツルギーの発現に向けて-」原田保・古賀広志・西田小百合編『海と島のブランドデザインー海洋国家の地域戦略』芙蓉書房出版、49-75
- 原田保・立川丈夫・西田小百合編 (2017)『スピリチュアリティによる地域価値発現戦略』学文社
- 原田保・西田小百合・宮本文宏(2020)「もう 1 つの地域デザインモデルとしての「IEST デザインモデルの提言」ー従来の「ZTCA デザインモデル」に加えて」地域デザイン学会誌『地域デザイン』第 15 号、11-37
- 原田保・宮本文宏 (2016)「場の論理から捉えたトポスの展開-身体性によるつながりの場とエコシステムの創造」地域デザイン学会誌『地域デザイン』第 8 号、9-36
- 宮脇靖典(2020)「「越境」する主体ー鉄道会社による地域ブランディングの試み」地域デザイン学会誌『地域デザイン』第 15 号、153-171
- 諸上茂光・木暮美菜(2020)「地域ブランディングにおけるコンテキスト構造のモデル化」地域デザイン学会誌『地域デザイン』第 15 号、39-57
- 諸上茂光・木暮美菜(2021a)「コンテキストによるゾーンの可変的定義モデル」地域デザイン学会誌『地域デザイン』第 18 号、169-186
- 諸上茂光・木暮美菜(2021b)「コンステレーションとゾーンの関係性に対する心理学的考察」地域デザイン学会誌『地域デザイン』第 18 号、255-260
- 矢吹雄平(2013)『地域マーケティング論ー地域経営の新地平』有斐閣
- 山崎朗他(2016)『地域政策』中央経済社
- 山本篤民 (2019)「伝統的工芸品産業の現状と海外販路開拓の課題」『商学集志』日本大学商学研究会、第 88 巻第 4 号、239-251